

保育所・幼稚園におけるジェンダー・フリー —保育者・保護者インタビューと観察をもとに—

○ 金子省子
(愛媛大学)

青野篤子
(松山東雲女子大学)

1. 目的

ジェンダー・フリーの保育を、保育の場をジェンダーにとらわれない環境とするとともに、男女平等の社会を実現していく主体を形成する乳幼児期の取り組みを含むものとして捉える。

保育所・幼稚園における「隠れたカリキュラム」については、これまで、名簿をはじめ、制服・かばん、その他日用品など園指定の物の、性による相違をはじめ、整列などにみられる性区分、保育者の言動などが検討されてきている。子どもにジェンダーへの気づきを促す取り組みとしては、子どもの言動を捉えての保育者のかかわりのほか、ジェンダー・フリーの視点にたって作成した絵本・紙芝居の導入なども行われている。また、保育所保育指針には、「性差、個人差にも配慮しつつ、性別による固定的な役割分業意識を植え付けることのないように配慮すること」が盛り込まれ、文部科学省の「0歳からのジェンダー教育推進事業」の各地での先駆的な実践や啓蒙活動などが進められているが、保育者・保護者の関心は一般には高いとは言えない。

本研究は、ジェンダー・フリー保育の障壁となっている保育の場にかかわる要因を明らかにするとともに、変革の契機となる事項を洗い出し整理・検討することで、ジェンダー・フリー保育の進展に資することを目的としている。先の発表(2003)では、ジェンダー・フリー保育の要件として、①保育者の男女平等に関する意識の醸成、②保育者のジェンダー理解が子ども理解と保育に及ぼす影響の検討、③保育の場の性区分や物のジェンダー構成の検討、④保護者との連携、を中心に述べた。

本研究では、保育者・保護者の認識と物的環境・人的環境の実態との関係について分析・考察する。

2. 方法

保育所2園、幼稚園3園についての保育者インタビューおよび保護者インタビューを実施し、同時に保育観察を行った。

(1) 保育者・保護者を対象としたインタビュー調査

2003年5月および2003年7月から9月、5園で保育者30名、保護者23名を対象とした。質問内容

は、保育者については、①保育者の属性、②保育の場の実態・認識、③保護者に関する認識と対応、④保育者間の話し合い・研修・情報、⑤ジェンダー観、⑥ジェンダー・フリー保育に関する認識と保育所・幼稚園の役割。保護者については、①保護者の属性、②家庭養育の実態・認識、③ジェンダーに関する知識・情報、④園・保育者への期待、⑤ジェンダー観。

(2) 保育観察

2003年6月から8月。各園の保育時間内の観察を行いビデオ撮影をした。

3. 分析・考察

(1) 保育所・幼稚園における性区分についての実態と保育者の認識

<物的環境について>

a. 名簿の性区分と靴箱などの順番・配置・色分け
今回対象の園は、混合名簿のみの園、男女別名簿と混合名簿がある園に分かれ、別名簿のみの園はなかった。靴箱は、男子・女子の順番、男女交互、男女混合という園がある。保育者が選択し貼ったシールについて、男子が乗り物や動物、女子が花などの傾向がみられた園もある。

名簿と靴箱などの具体的な現れ方の間にはずれがあること、「男女にかかわらない混合」と、「分けてから混ぜる」という方法があることが指摘される。

インタビューからは、これらの事項が保育者にとっては重要度が低く、性区分は子どもが理解しやすいものとして、保育者に便利であるという点で排除すべきとは考えられていないことがうかがわれた。

b. 制服等(制服・帽子・スモック・体操服・通園かばん・上靴)

今回対象園では、男女別で定められた物はなかった。かつて「男子青、女子赤」だった上靴を見直すとともに、数色の見本を示すなどして、多様な選択がみられるようになった園もあった。

c. 園で準備された日用品

コップなど男女別で定められた色が一部の園にみられた。

<人的環境について>

d. 整列

行事の際に男女別整列が観察されたが、インタビ

ューでは、ほとんどないという認識と日常的には各保育者にゆだねられているとの回答が各園の保育者に共通していた。このほか具体的には、「時にはあえて分けることがある」という回答があり、その理由として、男女の区分を学習することは必要との認識がみられた。

e. グループ・係活動など

年中から年長で男女別のあそびやグループが観察されたが、保育者によれば、子どもの選択の結果であるとされている。一部に保育者が男女が偏らないようグループをつくった園があるが、そこでは結果としてリーダーの性別も固定化していなかった。

f. 身体面での配慮

一部の園で着替えの際に男女を分ける配慮をしたことがあるとの回答がみられた。

g. その他の保育者の働きかけ

呼び方は子どもの家庭での呼ばれ方をもとに、多くが女子には「ちゃん」、男子には「くん」となっていた。

以上のように、物的・人的環境について、インタビューでは、「特に分けることはない」との回答がされているが、観察では、すべての園について部分的になんらかの性区分がみられた。インタビューからは、保育者の側に悩みや疑問はみられなかった。

(2) 保護者・家庭についての保育者の認識

特に問題とみなされて表明されることは多くないが、祖父母や親の性別期待に対し、個性を認めるような方向での働きかけをした例などが語られた。保育所・幼稚園への父親の参画については、オヤジの会などの活動を評価しており、現状を特に問題と捉える意見はなかった。1園で、保護者の問題提起により男女別になっていた運動会の景品の見直しをした例が語られた。

(3) 保育者の属性と認識との関係

保育経験による相違としては、男性の保育者のいる園が5園中3園であり、これらの園では、男性保育者間の相違や個性についての言及もあったが、いない園では漠然とした男性役割の期待が強いようであった。男性の保育者自身は、男性保育者として特別な役割を意識しているわけではないが、周囲からの男性役割の期待を感じている者もいた。

(4) 保育者のジェンダー観と男女平等に関する認識

今回対象者において、性差別についての切実な問題意識をもつ意見は皆無だった。むしろ女性職場と

して差別を感じないとの意見が多くみられ、セクハラなど教育の場とジェンダーに関する関心も高いとは言えない。人権教育の取り組みをはじめた園を除き、ジェンダー・フリー教材などの情報は届いていなかった。ただ、上靴の色や制服のスカートなどここ数年での変更が語られた園が複数あった。

(5) 保育者集団としての話し合い・研修など

ジェンダー視点に関する園単位での話し合いや取り組みは、人権教育に関する実践研究を行った園でみられた。

(6) 保護者と保育者との関係

保護者インタビューからは、保育の場に関するジェンダー視点からの意見はほとんどみられず、保育者・園への要望も特にはなかった。家庭での男女児に対する働きかけのほか女性の生き方に関する意見などが語られた。

4. 考察

以上のような結果をふまえ、次のような問題点を指摘しておきたい。

- ①着替えの際の配慮のように、「意識的に分ける」、男女混合のグループづくりのように「意識的に混ぜる」という対応のほか、保育者には意識化されにくい、園の「慣習」として受け止められている性区分が部分的に残っていること。
- ②個々の保育者に、日常的にゆだねられた事柄については、保育者間でも捉えにくく意識化されにくいこと。
- ③保育者に肯定的に受け止められる性区分があり、これについては、発達過程における認識として必要であり、性別のみを強調するのでもなければ問題はないとの考えがあること。
- ④全体として、保育者のもつ保育の場とジェンダーに関する情報は少ないこと。
- ⑤保護者については、保育の場のジェンダーに関する問題関心は高いとは言えないが、実際に具体的な事項がみえていないこと。

しかし、同時に、保育者の疑問が全体化された場合や保護者・研究者からの情報、問いかけにより見直しははかられたケースもみられた。保育者の気づきや学習による外部からの情報、一部の保護者の意見を位置づけ検討できる保育者集団や保護者との関係が見直しの背景にあることも指摘される。

<引用文献>金子省子 ジェンダー・フリー保育の要件について第56回日本保育学会発表論文集 2003